

勝ち組

愛国詐欺

「ポスト真実」と「南米勝ち組事件」

三山 喬

第8回

三三〇〇〇キロのふたり旅へ

ブラジルから南米大陸を陸路横断し、ペルーの在留邦人に「日本の戦勝」というデマを吹聴して寄付金をかすめ取った詐欺師ふたり組、阿部謙三と鳥越武が引き起こした騒動の顛末は、すでに述べてきたように、邦字紙『ペルー新報』が七四年に編纂した『在ペルー邦人75年の歩み』の言及が、今日に伝えられる情報のほぼすべてと言ってもいい。

ただ、このほかにも私は、一九四六年八月にふたりの活動が発覚し、関係者が大量検挙された際の現地一般紙の記事をいくつか入手できた。オリジナルの紙面は保存状態がかなり悪く、手に入れた複写でも記事本文の文字が随所でかすれ、読めなくなってしまう。いずれネイティブの専門家に、判読不能箇所を文

到着で危機がもたらされた」

ペルーでの新団体「愛国同志会」は「ラ・オルガン・サシオン・デ・パトリオティスモ・ソシアル（社会愛国主義の組織）」というスペイン語訳になっているが、「臣道連盟」は日本語そのまま「Shindo Renmei」と表記され、ペルーの一般国民にもすでにブラジル邦人社会の勝ち負け抗争が知れ渡っていたことがわかる。約五カ月前、三月七日には、ブラジル地方都市のバストス市で産業組合専務理事・溝部幾太が自宅裏庭で射殺され、負け組指導者として勝ち組の暗殺対象となる最初の事件が勃発した。

四月一日には、数人ずつふた手に分かれた勝ち組のテロリストグループが、サンパウロ市で負け組の指導的立場にいた元アルゼンチン公使・古谷重綱宅と元日本語教育普及会事務局長・野村忠三郎宅を襲撃し、古谷は警備の警官隊に守られて一命をとりとめたものの、野村は凶弾に落命した。

前年八月から、さまざまな戦勝デマがビラや口コミで拡散され、これを鎮めようとする負け組の認識運動が火に油を注ぐ格好になっていたブラジルの邦人社会

脈から推察してもらい、記事全体の復元を試みるつもりだが、現状でも問題なく読み取れる見出しやリードから、おおまかな内容は理解できる。

たとえば、阿部らの逮捕を伝えたペルーの代表紙『エル・コメルシオ』の第一報、八月九日付記事は『ペルーにつくられた「愛国同志会」は、ブラジルの「臣道連盟」にそっくりな組織だった』という見出しで報じられ、こんなリードから始まっている。

《中心人物のアベ・ケンソウとタケシ・トリゴエは、ブラジルでの危険極まりない日本人結社の存在が発覚したために、逃げてきた者たちだ。（ブラジルのような）扇動者が少なく平穏だった我が国にも、ふたりの

だが、これらの事件をきっかけに、勝ち負け両派の対立は血で血を洗う抗争へと発展し、両勢力による暗殺や報復が約十カ月間にわたって続発する異常事態になっていた。

近年の文献では、古谷や野村の事件を皮切りに続いた計画的テロについて「あくまで臣道連盟とは別個に誕生した過激派小グループによる犯行」とする見方が主流になっているが、ブラジルの世間一般には、勝ち組テロリスト「臣道連盟」という前提で、大半の事件が組織名とともに報じられた。隣国ペルーの新聞でも「Shindo Renmei」というだけで通じる話になっていたのである。

『75年の歩み』によれば、実際のところ愛国同志会は阿部たちがペルー入りするよりも前、前年十二月には誕生していたが、『エル・コメルシオ』紙は、阿部・鳥越の来訪で結成されたものと思ひ込み、「ブラジルを震撼させたあのテロ組織の類似団体がペルーにも生まれた」という点にニュース価値を置き、これを報じたのだった。

現地タブロイド紙『ラ・クロニカ』も同じ八月九日付記事を『日本の秘密マフィア、リマにも——ブラジ

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。著書に『ホームレス歌人のいた冬』（文春文庫）、『国権と島と涙〜沖縄の抗う民意を探る』（朝日新聞出版）、『一寸のペンの虫』（小社刊）など。